

市長記者会見記録

日時：2017年 4月26日（水）15時00分～15時28分

場所：第3庁舎18階 講堂

議題：川崎市の人口が150万人を突破しました！（総務企画局）

<内容>

《川崎市の人口が150万人を突破しました！》

司会： ただいまより市長記者会見を始めます。本日は、直前のご案内にもかかわらず、お忙しい中、臨時の市長会見にお集まりいただきありがとうございます。

それでは、福田市長から、川崎市の人口が150万人を突破したことについて発表いたします。市長、よろしく願いいたします。

市長： お集まりをいただきまして、まことにありがとうございます。

このたび、4月24日月曜日に、川崎市の人口が150万人を超えましたので、臨時の記者会見を開き、ご報告をさせていただくことになりました。

早速ではございますが、人口150万突破に至る経緯などにつきまして、お手元の「川崎市の人口が150万人を突破しました！」という見出しの資料でご説明をさせていただきたいと思っております。

川崎市は、大正13年に人口約5万人でスタートし、戦争の影響で一時減少した時期もありましたが、戦後の高度経済成長期には急速に人口が増加し、昭和47年に政令指定都市となった直後の昭和48年には100万人を超え、平成21年には140万人を超えました。その後、全国的には人口が減少するに転じる中であっても、交通利便性の高さや横須賀線武蔵小杉駅の開業をはじめとした都市基盤整備、ミュージア川崎などの魅力ある施設整備等もあり、人口増加が続きまして、今回150万人を超えることになりました。

下段の枠にありますとおり、本市の人口が140万人を超えた平成21年と今回を比較すると、全ての区で人口が増加しています。出生数が多いことによる自然増と、転入が転出を上回る社会増、若い世代の流入が多いこと、そして自然増加数が政令市1位であることなど、若く活力のまちであることが特徴となっております。

その詳細について、2ページをごらんください。

上段の「140万人突破時との比較」でございますが、140万人を超えた平成21年との比較を区別であらわしております。全ての区で人口が増加しておりますが、

その中でも、中原区が2万4,760人増と一番多く、武蔵小杉駅周辺の再開発等を背景に人口が増加いたしました。

下段の「人口の動き」につきましては、左のグラフの出生数から死亡数を引いた「自然増減の推移」では、出生数が死亡数を上回っており、平成19年以降、出生数は1万4,000人以上と自然増が続いております。

右のグラフの転入者から転出者を引いた「社会増減の推移」では、平成9年から転入超過による社会増加が続いております。

3ページをごらんいただきたいと思います。

上段の「年齢別の転入・転出者数」のグラフは、平成27年の国勢調査の結果でございますが、棒グラフの白抜き部分にありますとおり、進学や就職に伴う転居などにより、20代を中心とした若い世代において転入超過となっております。

下段の「他政令指定都市との比較」でございますが、左の表にありますとおり、一昨年、京都市を上回り7番目の人口となっております。右の表の「年齢3区分別人口割合」では、15歳から64歳の生産年齢人口が占める割合が最も高く、65歳以上の老年人口の割合が最も低くなっております。

続いて、4ページをごらんいただきたいと思います。

本市は、政令市の中で自然増加数が最も多く、出生率、婚姻率も高くなっております。

このように、首都圏の中心に位置する立地優位性、交通利便性に加え、文化・芸術・スポーツなどの魅力にあふれ、成長産業が集積する活力ある都市として発展を続けてきたことが、若い世代をはじめ、多くの皆様に選ばれる結果になったものと考えております。

続きまして、今後の取り組みを「150万人都市記念の取組について」の見出しの資料でご説明をいたしますので、ごらんいただければと思います。

今回、この記念すべき節目を多くの方とお祝いするとともに、シティプロモーションの好機と捉え、今後本市で展開されるさまざまな事業等を活用し発信してまいりたいと考えております。

具体的な事業につきましては、現在調整中でございますけれども、この取り組みの趣旨である「市民のシビックプライドの醸成」や「川崎の発展に寄与されたシニア世代の皆さんへの感謝の気持ち」などを取り入れた事業について「150万人都市記念」と銘打って実施するなど、市民の皆様と一緒に喜び、より一層川崎に愛着を感じていただく機会にしたいと考えております。

この取り組み期間は、本日4月26日から12月31日まででございます。

また、さまざまな事業において統一感を持って150万人を突破した本市の魅力や活力を内外に広く発信するとして、「150万人都市記念マーク」を作成いたしました。

コンセプトは、昨年策定したブランドメッセージと親和性のあるデザインとすることで、本市の持つ多彩な魅力や多様性を表現し、また、「多くの皆さんに川崎で暮らすことを選んでいただいたということで人口150万人を突破した」ということを祝福するイメージを持たせました。

期間中、さまざまな場面で積極的に使用し、まち全体で盛り上げていきたいと考えております。

これからも、安心して子育てができ、働き続けることができる、幸せあふれるまちとして、住みよいまちづくりに全力で取り組んでまいります。

私からは以上です。

司会： ありがとうございます。

それでは、質疑応答に入らせていただきます。

なお、本日の質疑につきましては、人口150万人突破に関することのみとさせていただきます。

進行につきましては、幹事社様、よろしく願いをいたします。

幹事社： 幹事社から2点ほど伺います。

まず、今、市長からもいろいろ説明があったんですが、1つ目は、150万人達成した率直な感想を改めていただくのと、自然増とか、あるいは武蔵小杉駅周辺の人口増とかいろいろあると思うんですが、市長の中では、特に2つぐらい挙げるとすると、どれが一番大きなファクターとして認識されているのか、そのあたりからまず伺えますか。

市長： 率直に、150万人という人口が増えていることというのは、まちの活力の源でありますので、素直にこの節目を喜びたいというふうに思っています。

人口が増えてきている理由というのは、先ほど申し上げたとおり、大型のマンションをはじめとした住宅がふえているということもありますし、交通利便性ととともに、特に10年間ぐらいで川崎の文化的な魅力が非常に高まっているという観点からも、そういうところが新しく転入されてきた方にとっては魅力的なのではないかなというふうに思いますし、また、毎年調査しております「この川崎に住み続けたいですか」という割合も、今年も過去最高を記録して、たしか71.2%だったと思いますが、今住んでおられる方たちの満足度も高いということが、そういった意味では定着率と、

それから新たに転入してくる、流入されてくる方に、それぞれに魅力的なまちになっているのではないかなというふうに思っています。

幹事社： 今のご回答の関連なんですけど、文化的な魅力というふうにおっしゃっていましたが、これは例えばどのようなことを。

市長： 「音楽のまち」づくりをはじめとして、スポーツのまちづくりということで、仕事をするとか、ただ住まうということだけではない、いわゆるライフスタイルというか、暮らしの中で、文化だとかスポーツだとかというものは大きいのではないかなというふうに思います。

幹事社： その関連なんですけど、音楽にしろ、いろんなイベントがあります。スポーツもあるんですけど、そういうところに参加しやすい機会というか、そういうのを市としていろいろ提供されているということをおっしゃりたいんですか。

市長： 市だけではなくて、いわゆる民間の活力が旺盛なのではないかなというふうに思います。

幹事社： わかりました。あともう1点なんですけど、先だって総合計画の第2次実施計画の中で、考え方として、これは行財政改革プログラムにこの前出ていたんですけど、2014年8月の市の将来人口推計だと、2030年ぐらいまで人口が増えていくけれども、15歳未満の年少人口のピークが、当初は平成27年としていたんですけど、引き続き増えているということで、そうすると、当然のことながら、引き続き人口増に対応しながら、どこかでまた減少していくわけであって、両にらみというか、そういう政策が必要になってくると思うんですけど、そのあたりについて、今後、市長としてはどのようにお考えなのかというところを伺えないでしょうか。

市長： これは、実施計画にあわせて人口推計を今改めてやり直しているところなんですけど、今おっしゃっていただいたとおり、平均年齢が一番若いといいながらも、これから高齢化が急速に地方都市よりも進むので、それにいち早く対応する状況をつくり出さないといけないというのは、それはものすごい危機感だというふうに認識しています。ですから、それに対応できるような事業、施策というものを第2次実施計画の中で盛り込んでいくということになると思います。

幹事社： わかりました。

幹事社からは以上です。

記者： 今回、随分、これまでの予測よりも早く前倒しでの達成となりました。これについて、とりわけどういう要因があって、これまで秋ぐらいというふうな見方で説

明されていたかと思うんですけども、半年近く前倒ししての達成となった、背景となった要因というものを教えてください。

あと、このペースで増えていった場合に、これまで市が出している今後の人口の推計の予測なんですけれども、もう既に、これについても今後影響を与えてくると、新しい人口の見通しなどを発表される考えとかはありますでしょうか。

市長： まず、ごめんなさい、最初の……。

記者： 半年近く前倒しになった要因。

市長： 申しわけありません。私も、この前の会見で、秋ぐらいじゃないかというふうに申し上げたところの矢先に、こんな早かったというのが、実は僕もものすごく驚いていて、職員も含めて、みんな、こんなに早くとはという感じなんですね。どんなに早くても夏ぐらいだろうというふうなことは思っていたので、ちょっと早いなというのが印象です。

要因については、これから分析というふうなものはあると思うんですが、まだそういった分析には至っておりません。

それから、人口推計は、今見直しをやっているところでありまして、確実に上振れするということになるというふうに思います。なるべく早い時期にお示ししていきたいというふうに思っています。

記者： わかりました。ありがとうございます。

記者： 人口が増加していくというのは、国全体では人口が減少局面に入っている中で、非常に他都市からしてみれば、ある意味、うらやましがられるところだと思うんです。一方で、川崎市は市域当たりの人口の密度が最も高い都市であって、それに伴って、人口が集中している都市では、例えば武蔵小杉駅ではホームが狭隘化してしまったりだとか、あるいは人口密集地域の都市整備が進まないであるとか、あるいは不燃化がなかなか進まないとか、人口が集中しているがゆえに難しい問題というのがあります。こうした問題を解決していく都心インフラ、もうちょっと広めのライフインフラを川崎市として考えていかなければならないと思うんですけども、人口増は喜ばしいという前提で、どういったところが一番課題であって、今後どういうところに市として注力していくべきと思われるのか。人口増がゆえの課題に対する姿勢を教えてください。

市長： まず、政令市の中では面積が一番狭い川崎市で、人口7番目という極度に人口密度の高いところでありますので、今おっしゃっていただいたような、それに伴う

課題というのはたくさんあると思います。例えば防災1つとってみても、密度が高いというのは、それだけでもいろんな防災に対する課題が出てくるわけで、そんなことから、はっきり言って、全国ではこういう課題に直面している都市というのはすごく少ないと思うんですよね。なので、引き続き、この人口の多い大都市に必要なインフラ整備は、厳しい財政状況の中でも計画的にやっつけていかないといけないというふうなものもありますし、一方で、人口減少を見据えていかなくちゃいけないので、そのバランスというのが非常に難しい舵取りだなというふうには思っております。

記者： そうですね。市長が年度の当初で、今年、特に力を入れたいことの1つとして、地域包括ケアシステムということを挙げられていました。川崎の人口増の特徴としては、自然増よりか10倍ぐらいで社会増が多くて、つまり入れかわりが非常に激しいということで、地域コミュニティを形成していくことの難しさというものが挙げられると思います。主に若い世代が中心ですけれども、ただ、川崎の地域包括ケアシステムは、子供からお年寄りまでなので、まさに市長が一丁目一番地として掲げている地域包括ケアシステムの構築などにも、人口の増加というのは、いい影響も悪い影響も与えると思うんですが、課題に対応していかなければならないというところをもうちょっと具体的に、どういうところに気をつけていけばいいのか、あるいはどういうぐあいにこれからコミュニティの形成を図っていくのかという考えを聞かせてください。

市長： 都市部に共通するのは、いつも言っているとおり、いわゆる地域のかかわり方というか、絆というか、そういったところが希薄化されているところが問題で、その問題を解決、新たに絆をつくり出していくというのが地域包括ケアシステムなわけで、そういった意味では、非常に難しさを感じています。

一方で、きのうも市役所に来ていただいた働き盛り、子育て中のママさんたちが、新しい自分たちのコミュニティを形成して、子育てしやすいまちづくりを自分たちの手で行政と共同してつくっていかうという、そういう意識も至るところで出てきています。ですから、若いから地域に入っていないということではなくて、むしろ新しい形も含めて地域にかかわってくるという人たちが増えていく、そういうような仕組みづくりだとか環境づくりに、行政としてもやれることをやっつけていかないといけないというふうな感覚でいます。ですから、全部行政で何かをやっていくというのは、これまでも通用していませんけれども、より市民力というか、150万人都市にふさわしい成熟感のある市民協働のあり方がこれからももっと求められていくんじゃないかなというふうに思います。

記者： もう1点、この間も総合計画の実施計画にあわせて市のイメージ調査をやりましたが、結果としてあまり芳しくない。これは、その前の調査もそうですし、もっとさかのぼると、平成16年度だったと思うんですけども、シティプロモーションとか、ブランディングをやっていたいかなければならないというときから、一貫して川崎市は「よい」と「悪い」を比べると、悪いイメージを持たれていることが対外的には多いんですが、これは、ただ、離れれば離れるほど悪いイメージが高いので、知らないからということなのかもしれないですけども、個人的には、悪いイメージがあるのに転入者がこんなに増えるというのは、なぜなんだろうという感じがするんですが、これはどういうぐあいに市長はごらんになりますか。

市長： 意外と、私、思っているのは、昔の、いわゆる1950年代、60年代をご存じの全国の比較的年齢層の高い世代が、川崎ってあの状態が続いているんじゃないかというふうに思われているのは、結構大きいと思います。逆に、転入してきていただいている20代、30代というのは、もう既に川崎に対してのイメージというのは、もともといいイメージを持っている方が多いので、そういった意味での年齢的な差というのは出ているんじゃないかなというふうに私は感じています。ですから、こういうことをし続けていくというか、イベント的にすごい楽しいことをやる以上に、さっきの地域包括ケアシステムではないですけども、政策的に、このまちが本当にいいまちになってきているというのを地道に積み重ねていくということが、結果的に、長期にわたって、川崎って本当にいいところだねということは、市内外から認めていただける、そんなブランディングになっていくんじゃないかなというふうには思っています。

記者： ありがとうございます。

記者： 今の話に関連することかもしれないんですけども、平成28年度の市民アンケートで、20代、30代の若者が川崎市に対してある程度満足しているという結果が多かったんですね。具体的に、市長の所感として、なぜ20代、30代の人満足しているのかなというのを教えていただければなと思います。

市長： やはり転入してくる方にとっては、就職を機にとか、あるいは就学を機にというふうな形で入ってこられる。特に20歳から25歳までの、この刻みが一番転入としては多いわけですね。ですから、そういった意味では、利便性ということもあると思いますし、それから先ほど申し上げたような、スポーツだとか、若者文化というか、ショッピングにしても、そういったところが充実しているのではないかなという

ふうには私は思っております。

記者： ありがとうございます。

記者： 先ほど質問されていた中で、課題としては、人口増の課題ということでは防災の取り組みだということなんですけども、ほかに、今、課題だなど思っているのは、たくさん思っておられると思うんですけども、ほかに、例えば待機児童とか、いろんな問題がすぐ思いつくと思うんですけど、もう少し、どんな課題があるかというのを、もうちょっと……。

市長： それは人口増にかかわることですか。

記者： 人口増ですね。

市長： 人口増で、特に若い世代が多いということは、ある意味、すぐ待機児童の話に直結しますので、そういったことというのは、これからも引き続いて優先順位の高い課題だということは間違いありませんし、子供関係の話というのは、同じように、待機児童だけの話ではない、教育含めてですね。そういったものをさらに充実させていくということも必要でしょうし、一方で、高齢化は確実に進んでいますので、そこに対する施策というのは、新しいものを何かというよりも、地域包括ケアみたいなものでつなげていくというか、まさに他職種連携みたいな地域での取り組みというものが重要になってくるというふうに思っています。

記者： あと1点なんですけど、先ほど人口推計を改めて今見直してということなんですけど、上振れするんじゃないかという。確認なんですけど、市の将来人口の推計だと、2030年に152万人、これがピーク。この152人というのが、上振れするという意味合いでいいんですか。

市長： おそらく、そういうふうな形になると思います。

記者： 140、150ときて、160というのがあるのかどうかかわらないですけども、その辺ぐらいまでは見込めそうなんですか。

市長： いや、それはちょっと……。またご報告させていただきたいと思います。

記者： わかりました。

記者： 既に京都市は、一昨年に抜きました。次は神戸市が目の前だと思いますけれども、現時点でいつぐらいに到達しそうな見通しが……。

市長： それはわかりません。神戸市も、おそらく伸びていたと思いますね、トレンドとしては。違いましたっけ。人口、ちょっと減になっていますかね。

記者： 関西はちょっと厳しいですね。

市長： まだ全く予想が、そもそも私どもの人口推計がまだ出ていないので、何とも今の時点では申し上げられません。

記者： 人口推計は、いつごろ、秋でいいんですか。

市長： なるべく早くというイメージでやっているのですが、いつだと言えないんですけども、第2期計画を立てていくもととなる数字でありますので、なるべく早くお示しして、各局でそれに基づいた計画を立てていかないといけませんから。

司会： いかがでございましょうか。よろしいでしょうか。

それでは、以上をもちまして終了いたします。ありがとうございました。

市長： ありがとうございました。

(以上)

この記録は、重複した言葉づかい、明らかな言い直しや質問項目などを整理したうえで掲載しています。

(お問い合わせ) 川崎市役所総務企画局シティプロモーション推進室報道担当

電話番号：044(200)2355